

令和5年度 奈良市立都祁こども園 研究実践概要

園長名 鍋谷 理佐子  
全園児数 85名

- 1. 研究主題 「心豊かで 生き生きとたくましく活動する子どもの育成をめざして」  
～一人一人が自分らしさを発揮しながら  
互いに響き合える環境の中で～
- 2. 研究年度 3年度
- 3. 研究主題設定理由

0歳児から5歳児までの様々な園児が、遊びや生活の中で〈もの〉〈ひと〉〈こと〉と関わり、様々な経験や体験を通じて学び、成長している。発達の特徴や個人差など一人一人の子ども理解を深めると共に、子ども達が「ふしぎだな」「どうなっているのかな」「おもしろいな」と自らわくわくと心を動かす姿が見られる。一人一人が自分らしさを発揮しながら互いに響き合える環境の中で、子ども達がどのように感じ、成長していくのかを考えていきたいと思い、研究主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・子ども一人一人が、自分らしさを発揮しながら夢中になって〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に関わって遊ぶ姿に着目し、互いに響き合える環境を探る。

②研究の重点

- ・乳幼児の発達に応じた保育内容を工夫し、それぞれの年齢の子ども達が自分らしさを発揮し、心を動かして〈もの〉〈ひと〉〈こと〉と関わり、どのような環境で互いに響き合い、変化していくのかについて考える。

③活動の方法

.....自分らしさを発揮している姿 .....互いに響き合っている姿  
.....環境によって変化した姿 .....保育者の援助

【0歳児】 1月 「どうぞ～！」 A児(1歳7か月)B児(1歳3か月)の姿から

ままごとコーナーを作り、保育者も一緒に食べたり飲んだりマネをしながら見立て遊びを楽しみ始めている。ある日ままごとコーナーの椅子が1つだけが机に向かってあった。ままごとコーナーに来たA児、B児が1つのイスに偶然同じようなタイミングで座ろうとしたのでイスの取り合いにならないよう「こっちにもイスあるよ」と、少しだけ後に来たA児に伝えるとそのイスを見て、【あっ】という表情になったかと思うと「どうぞ！」と言ってイスをB児に譲っていた。B児が座りままごとを始めたので「Aちゃんありがとう。どうぞって言ってあげたね」と声をかけると、A児は満足そうな表情でイスに座った。その後、保育者も一緒にA児B児とお皿に食べ物の玩具を乗せてスプーンで食べるマナをしたりしながらままごと遊びを楽しんだ。



<評価>

早朝、延長保育でままごとコーナーがあるクラスへ行く機会が多い子ども達で、大きい子がままごとをする姿をまねて遊んでいたため、0歳のクラスでもできるようにままごとコーナーの環境を整えた。まだ一人遊びか保育者と一緒に遊ぶことが主であるが、同じイスに座ろうとした出来事で保育者からの言葉かけがきっかけとなり、譲ってあげようという気持ちの芽生えや譲ってもらって嬉しいという気持ちを味わう機会になったと思う。

0歳は身近な大人との関係がとても大切で、そこで育った安心感から他の子への興味や関ろうとする気持ちが育って行く大切な時期なので、これからも一人一人とゆったり丁寧に関わることを大切にしていきたい。

【1歳児】 12月「カメになったからー」 A児（2歳 7ヵ月） B児（1歳 11ヵ月）の姿から

0歳児から遊んできた段ボールの押し車を廊下での遊びに出していた。最初は段ボールの中に入ったり、入っている友達を押したりしながら遊んでいたが、ある日、A児が段ボールをひっくり返し、体を丸めた頭から被って「カメになったからー」と言って遊び始めた。保育者が「Aちゃんどこかなあ？ トントントン」と探す真似をすると、「ばあ！」と顔を出すとやり取りを楽しんでいた。その様子にすぐ気づいたB児は、A児と同じように真似て段ボールを頭から被り隠れている。「トントントン」とB児が隠れた段ボールを保育者が叩くと、B児も嬉しそうに「ばあ！」と顔を出した。その遊びが他の子どもにも広がり、隠れる遊びと見つける遊びを繰り返して楽しんだ。



<評価>

部屋ではマットがあり、遊びにくいいため、廊下での遊びに段ボールの押し車を出していた。0歳児から慣れ親しんできた「もの」だったので、安心して遊ぶ姿があった。成長と共に同じ「もの」でも扱い方や遊び方が変わることを実感する。保育者の提案ではなく、自ら見つけた遊びの面白さに共感し、やり取りしながら一緒に遊ぶことで、他の子どもも興味を持ち、同じように遊ぼうとする姿に広がっていった。日々の生活の中で一人一人の欲求や甘えを受け止め、気持ちや思いを安心して表すことができる保育者との信頼関係があるからこそ、安心して「もの」と関わり、「ひと」と関わることに繋がっていることを改めて感じた。これからは子どもの気付きやつぶやきを丁寧に受け止めていきたい。

【2歳児】 7月「なにかきこえる！」 A児（2歳7か月） B児（2歳11か月）の姿から

園庭で、ジョウロやペットボトル、カップなどのさまざまなものを使って水を汲んだり、流したりして水遊びを楽しんでいた。A児は近くにあった排水溝を見つけると穴を覗き込み、持っていたジョウロで水をそーっと注ぎ始めた。何度か繰り返し入れていると、「何か聞こえる！」と穴に耳を澄ませるA児。保育者も聞いてみると、排水溝の中に溜まっていた水に上からしずくが落ちて、音が響いていた。B児もやってきて「ポタポタいってる」と、一緒に耳を澄ませ、持っていたペットボトルで水を流した。「穴から音が聞こえるね、不思議だね」と保育者が言うと、「ピチャンっていってるよ、雨だ！」とA児が言った。バケツを持ったB児が勢いよく水を流し、「ザッパーン！」「雨いっぱい降ってきた」と喜ぶA、B児。その後も繰り返し穴に水を流したり、耳を澄ませたりして水の音に興味をもっていた。



<評価>

さまざまな「もの」を使って水を汲んだり流したりする楽しさを感じてほしいと思い、大きさや形の違うペットボトルやカップ、ジョウロなどを子ども達が見つけやすい場所に用意しておいた。排水溝の穴から音がすることに気付き、そーっと注いだり、勢いよく流したりしてそれぞれの雨のイメージをもって、自分の使いたい玩具を見つけて遊ぼうとする姿が見られた。また、子どもが偶然見つけたことを見逃さずに丁寧に受け止め、保育者も一緒に体験し、楽しさや面白さに共感したことで水の音への興味も広がっていった。これからは、子どもの気付きや小さなつぶやきを大切に受け止め、イメージを広げながら遊ぶことができるように関わってきたい。

【3歳児】 7月 「ザリガニいっぱいつかまえた！」

タライに水を溜めてペットボトルのキャップをたくさん浮かべている様子を見たり、好きな色のキャップを集めたりして遊んでいた。お玉やスプーン、小さいスコップなど子ども達が好きな道具を選んで使えるように用意しておいたことで、使いたい道具を選び、キャップをすくって、バケツや鍋に集める遊びが始まった。「白いキャップ集めよう」「赤いキャップが欲しい！」など言いながら集め、思い思いに遊んでいた。集めたキャップをお鍋に入れ、スープやカレーに見立ててごっこ遊びを楽しむ姿も見られた。



ある日、キャップ集めを楽しんでいたA児のところにB児が「入れて」とやってきて、一緒にキャップ集めが始まった。B児が「ザリガニいっぱいつかまえた！」と嬉しそうにキャップがたくさん入ったバケツを保育者に見せ、「本当だね。ザリガニがいっぱいだね」と受け止めるとA児も「私もザリガニいっぱいつかまえたよ」と見せた。その様子を見ていた周りの子ども達も「何してるの?」「僕も(ザリガニ)つかまえない」と興味が広がっていった。A児「ザリガニいっぱいつかまえたから、今からフライパンで焼いてくるね」B児「僕は今から大阪までザリガニを届けに行きます」などイメージがどんどん広がり、楽しい気持ちを共有しながら遊ぶ姿が見られた。

<評価>

ペットボトルのキャップをたくさん用意し、置いておくことで、水を入れたタライに浮かべて遊ぶ姿につながった。水遊びに必要なものを子ども達の目につきやすい場所に置いておくことで、自分で使いたい物を選び、遊び出す子ども達の姿が見られた。お玉やスプーン、小さいスコップなど身近な玩具を使って子ども達から遊びのアイデアが広がっていった。初めは一人でキャップが浮かぶ様子を見たり、すくったりすることを楽しんでいたら、子どもが楽しんでいることを保育者が言葉で周りの幼児に知らせると、近くで遊んでいる友達の様子にも興味を示し、遊びの中でのイメージが広がり、一緒に遊ぶ楽しさを感じるきっかけとなった。遊びの中の子どもの発想を大切に受け止め、遊びがより楽しくなるように働きかけていきたい。

【4歳児】 12月 「混ぜるとどんな色になる？」

寒い日の朝、戸外に出ると氷が出来ており、それを見つけた子ども達と氷づくりをすることになった。つくる中で「色の氷つくったらきれいなんちゃう」と案が出、草花は無かったため絵の具を出した。「黒の氷つくってみよう」「私はきれいな赤！」と、それぞれ好きな色の色水をつくり、プリンカップや製氷皿などに入れてつくっていた。製氷皿で1マスずつ別の色をつくらせていたA児が「あれ、隣と色混ざった！」と保育者に見せ、「何色と何色混ざったの？」と聞くと、「青とピンク！ほんで紫になった！」と嬉しそうに教えてくれた。保育者が「いろんな色つくれそうやな」と言うと、A児が「他の色でもやってみる！」と試し始めた。それを見た他の子どもたちも、「やってみよう!」「その色ってどの色混ぜたん?」「黄色と青でメロンジュース」「全部混ぜたらコーヒードキ」など、「ちょっとやったら薄い色」と、それぞれ試したり、教え合ったり、飲み物に見立てたりしながら色水づくり、氷づくりを楽しんでいた。その後、実際に凍った色水を見て、「ジュースがアイスになった！」と、嬉しそうに取り出し、「いらっしゃいませーアイス屋さんですよ」「水に入れると色が変わる魔法のジュースだよ」と遊びに取り入れる姿があった。



<評価>

偶然の色の交ざりから色の変化に気付き、そこからイメージを広げてジュースなどに見立てながら遊びが広がった。様々な容器をたくさん用意しておくことで「他の色はどうなるかな?」と容器を使って繰り返し試したり、保育者が周りに知らせたことから友達と教え合ったり、イメージを共有したりする姿に繋がった。実際に氷ができる子ども達もとても喜び、その後もジュースづくりや氷づくりを楽しんだり、ジュース屋さんやかき氷屋さんで発展したりする姿があった。今後も遊びの中で子ども達の気付きや思いを大切に受け止めながら遊びがさらに広がっていくように一緒に考えていきたい。

【5歳児】 11月 「まつぼっくりがゾウや」

まつぼっくりやドングリなど秋の自然物を使ってやじろべえづくりをしているA児。「まつぼっくりが絶対重たいで」と言いながら、片方にはまつぼっくりをつけ、片方にはドングリをつけた。A児「ドングリ何個つけたらバランスよくなるかな?」と、まつぼっくりとドングリがつり合うようにひとつずつドングリを増やしていく姿があった。保育者が「どう? バランスとれた?」とA児に聞いてみると「全然バランス取れへんわ。まつぼっくりってめっちゃ重たいねんな」と、ゆらゆら揺れるやじろべえを見ていた。保育者が「今、ドングリ何個ついてるの?」と数に興味をもてるように聞いてみると、A児はドングリを数え始め「6個つけた」と答えた。保育者が「じゃあもっとドングリつけないとあかんのかな? どうする?」とA児と一緒に考えられるような声掛けをした。そこへB児がやってきて「おお、Aくんのすごい! めっちゃドングリついてるやん」とA児のやじろべえに共感して、B児も一緒につくり始めた。しばらくすると「やったー! バランスよくなったで」と喜び、保育者に見せにきた。保育者が「すごい、バランス取れたね。全部でドングリ何個つけたの?」と聞いてみると、A児はドングリを数え「全部で9個ついた」と答えた。「まつぼっくりがゾウで、ドングリがネズミやったわ」とA児が笑って話すと、B児も「じゃあぼくもネズミいっぱいつけよ」と2人で笑っていた。



<評価>

秋の自然物を豊富に用意し、子ども達が試したり工夫したりできるよう、また、いろいろな発想を遊びの中に取り入れられるよう環境を用意した。ものの重さや軽さ、大小の違いに気付き、左右がつり合うためにどうすれば良いか考えたり、友達と考えを伝え合ったりする機会につながった。大きいものが重い、小さいものが軽いという固定観念に捉われず、生活経験の中から自然物の大きさを動物の大きさに例えたり、保育者が数に興味をもてるように声を掛けたことで、ドングリの数を数え比べたりする姿があった。今後もものの重さや大きさ、形の違い、数への関心が広がっていくような遊びを工夫したり、いろいろな遊びから面白さや不思議さを感じたりしてほしい。

## 5. 研究の成果

子ども一人一人と保育者が信頼関係を築き、安定した生活や遊びを積み重ねることで、遊びの中で考えたり試したりし、友達や保育者との関わりから存在を認め合ったり、相手の思いに気付き、受け止めたりする姿につながった。それぞれの年齢や発達に応じてわくわくドキドキする瞬間を大切にしながら〈もの〉〈ひと〉〈こと〉と主体的に関わっていける環境を整えることで、自ら考えたり、繰り返し試したり「もっとやってみよう」と言う姿につながった。

乳児クラスとしても、安心できる保育者との関係の中で子ども達がじっくりと遊べるように、玩具を見つけて取り出しやすい場の工夫等、環境を整えてきた。それぞれの成長発達に合わせて繰り返し環境を見直してきたことで、年齢を越えて一緒に関わってイメージを膨らませながら遊べるようになってきた。

## 6. 今後の課題

今後もより一層、子ども達が自己肯定感を感じ、自分らしさを発揮していけるよう、保育者間で一人一人の発達に応じた子ども理解を深め続け、互いに響き合い、遊び(学び)が発展できる環境構成や援助の工夫を探っていきたい。